

平成 21 年 5 月 11 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520563

研究課題名（和文）後期ローマ帝国時代西方属州の政治的展開に関する多元的解析の試み

研究課題名（英文） Political history of the western provinces in the Later Roman Empire : a study of the political process

研究代表者

南川 高志 (MINAMIKAWA TAKASHI)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40171099

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ローマ帝国、古代末期、属州、ゲルマン人、ブリテン島、ドイツ、スイス、リメス

1. 研究計画の概要

本研究は、帝政ローマ時代の後半、いわゆる後期ローマ帝国時代の帝国西部の政治状況を多元的に分析しようとするものである。近年の学界における古代終焉期研究と西ヨーロッパ初期中世史研究の発展を批判的に摂取し、また帝政前半期に関する自身の研究成果を踏まえつつ、後期ローマ帝国時代の帝国西部の政治状況を、独自の視点から検討する。「独自の視点」とは、従来の諸研究のようにローマ市やイタリアを中心とする地中海帝国としてのローマ帝国の動向を基軸とせず、むしろイタリアを離れた辺境の属州に視点を置き、時代を動かす動因の場を考察することである。さらに、帝国をハイブリッドな構造体と捉える観点から、古代終焉期の政治力学を論じる際に「ローマ人」対「ゲルマン人」といった安易な二項対立に陥らずに、多元的な解析を試みることも、本研究の独創的な作業である。辺境属州こそ古代から中世への移行期の政治的激動の場であり、また安易な二項対立を取らない解析によって、研究の特殊ヨーロッパ的な性格を克服できると期待される

2. 研究の進捗状況

(1) 計画調書に掲げたまず第 1 の課題である後期ローマ帝国の政治史に関する研究史の精査を、これまでの 3 年間を通じて実施してきた。古い諸研究の検討も重要ではあるが、とくに 1980 年代以降の「古代末期」概念が話題になって後の研究動向について、論争を整理しつつ、21 世紀初めまで検討した。

(2) 第 2 番目の重要課題である、西方属州の古代終焉期の実態を考古学史料から考察する作業については、毎年度夏季に海外調査を計画通り実施して、遺跡や博物館の調査をするとともに、イギリス、ドイツの研究機関所属の同分野研究者と意見交換し、また英独諸大学の所蔵資料を利用して分析を進めた。属州ブリタンニア、属州ゲルマニア、属州ノリクムやパンノニアなど、後期ローマ帝国時代のライン川周辺属州やドナウ上・中流域属州の実態解明に挑んだ。

3. 現在までの達成度

② おおむね順調に進展している。

(理由)

(1) 研究史の検討において最も重要な論点は、後期ローマ帝国時代をどのように捉えるべきかという大きな問題であり、これについて、「古代末期」概念の有効をめぐる論争を中心にして検討してきたが、関係する研究者を集めて主宰した日本西洋史学会第 58 回大会でのシンポジウムは、この課題について新たな情報と考え方を与えてくれた点で特筆に値する。貴重なこのシンポジウムの成果は、すでにまとめて、学会誌『西洋史学』に投稿した。

(2) 分析法上の問題に関する大きな論点として、「ゲルマン人」をどう扱うかという課題があり、これについても古代から現代に至るまでの「ゲルマン」解釈史や研究史を概観することに努めてきたが、近年の初期西欧中世史研究の成果に学びつつ、ようやくローマ

史での「ゲルマン人」の捉え方が見えてきた。これを紀元3世紀以降の歴史叙述に生かすところまで、後1歩という段階である。

(3) 考古学の観点から当該地域の後期ローマ帝国時代の実態を探る作業については、関係遺跡を調査するとともに、イギリスのケンブリッジ大学、オーストリアのウィーン大学、ハンガリーのアクインクム博物館、ドイツの在ミュンヘン・ドイツ考古学研究所を訪れて研究者と意見交換し、それぞれの研究機関の所蔵資料を利用して、分析を進めた。日本では得られない、現地でのみ集めることのできる資料や情報を獲得できたこと、研究者との意見交換から、ヨーロッパ人研究者と日本人研究者との間にある問題の認識の違いを理解できたことは、たいへん意義ある成果であった。海外調査とその後の研究をもとにして、遺跡の実態について『西洋古代史研究』誌上で2度にわたり報告し、また欧米研究者と日本人研究者との視角の違いやそれを日本人研究者が研究に生かす方途について英文の論文を執筆した。この英文論文は、まもなくドイツの出版社より刊行される論文集に収められる予定になっている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 後期ローマ帝国の捉え方について、現在の学界状況を踏まえつつも、独自の観点を獲得できつつあるので、本研究の最終年度には、それらを歴史叙述に生かすように試みたいと思っている。「ゲルマン人」の新たな解釈を取り込んで、後期ローマ帝国の帝国西部における激動を、新しい視角から描くことを課題としたい。

(2) 後期ローマ帝国の実態を考古学的な観点から解明する試みは、最終年度に最も大きな激動を被った現フランス地域の調査をもって、一応の締めくくりとしたい。フランス東部を中心に遺跡を調査するとともに、スイス・ジュネーブの研究機関を利用して、文献学と考古学と両者の研究を融合することを目標としたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 南川高志、リッチバラとポートチェスター、西洋古代史研究、6、2006、41-54
- ② 南川高志、ハンガリーのローマ帝国、西洋古代史研究、8、2008、23-41
- ③ 南川高志、大清水裕著「3世紀後半のイタリヤ統治の変容と都市社会」(書評論文)、法制史研究、58、2009、415-417

〔学会発表〕(計2件)

- ① 南川高志、遺跡と表象から考える古代ローマ帝国像、関学西洋史研究会第10回年次大会、2007年11月18日、関西学院大学
- ② 南川高志、ローマ帝国の「衰亡」とは何か、日本西洋史学会第58回大会、2008年5月11日、島根大学

〔図書〕(計3件)

- ① 南川高志、共著、京都と北京(紀平英作・吉本道雅編)、京都大学学術出版会、2006、総ページ数271、南川高志執筆部分228-249
- ② 南川高志、共編著(服部良久・山邊規子と共編)、大学で学ぶ西洋史[古代・中世]、ミネルヴァ書房、2006、総ページ数359
- ③ Minamikawa Takashi、共著、Applied Classics (Angelos Chaniotis et al. eds.) Franz Steiner社(ドイツ)、2009(5月刊行予定)南川高志執筆The Power of Identity: a Japanese Perspective on Ancient History